

## 母 語

(6)

### 倉 橋 惣 三

に御馳走した楽しい話。

——附屬幼稚園

には相當廣い附屬農園がある。その農園主任の及川さんを始め、先生方大の熱心で（但し主事を除く）季節々々の作もつが出来来る。今年も麥が可なりの收穫（但し俵數を略す）幼稚園總出のあねさま綾りで、刈りとつたところへ、お孫さん達の送り迎えをしていられるP・T・A・のお年寄り方が、手傳いを申し出されて、山（小さい山）のようなもみになった。さあこうなると慾が出る。先生の慾は、いつでも、子ども達の喜ぶ顔を見たい慾である。農園主任の發意で先生方の大賛

〇題して『P・T・Aの饗宴』といえは大きですが、東京女高師の附屬幼稚園の『先生と親の會』で、一切手づくりのおせんべいを、子どもさん達

成をしたのは、これを粉にひいて、せんべいに焼いて、みんなにたべさせたらという案であつた。これには勿論主事も賛成した。（責任上毒味をすることになるからでもある）ところが、一口にせんべいというが、幼稚園だけでは一寸むかししい。といつて、せんべい屋に頼んだのでは興がない。そこでP・T・A・の幹事さん達に集つて貰つて相談したら、みんなの手でということに相談が一決した。幹事さんの中に、こないだの遠足に、お手製のおいしいせんべいをもつて来て下さつた、せんべい焼の素人名人（？）が二人もいられたのも、自信のある分擔の相談が出来た譯である。

その御馳走は、七月八日のP・T・Aの研究會の日ということになつて、その前に、白い粉の幾袋と、せんべいを焼く道具の幾つかが、先ず幼稚園に勢ぞろいした。それが、甘いせんべいの大かんの幾つかになつたまでの過程は、なか／＼の手教だから省略するが、麥粉をたした人、サツカリンを出した人、鶏卵や山羊

の乳まで持ち寄つた人もあつたことを後で聞いた。道理で、毒味した時（一枚ではよく分らんといつて二枚も）ほんとうに結構な味だつた。焼き方も、商賣人はだしに見ごとに焼けていた。

さあ、八日の當日は、P・T・A・のお母さん方が、遊戲室に集つて、某研究所の博士から、『この頃のありあわせ材料で出来る、子どものための榮養食』という講話を聴いている間に、組毎に、その、先生と親との手だけで作つた甘いおせんべいが配られた。前日の七夕の色紙が、そのまゝに飾られている下で、にこ／＼顔を見あわせて、おせんべいを喜んでたべている、子どもさん達の満足を想像して下さい。六つの組全園が同時にせんべいをたべたのだから、パリ／＼パリと響き渡つた。數日前、これも農園のジャガイモを、ふかしてたべさせた時、大喜びでしたが、それ以上でしたと、及川さんの話。今度はTだけでなくPの味もはいつてるのだから、その筈だろう。——こういうこともP・T・A・の活動の一例。